

大学の世界展開力強化事業

Campus Asia Plus(Mode 3)

—アジアの大学間連携による持続的**社会基盤整備を支えるグローバル人材育成事業**—

Asia Intercollegiate Cooperative Project for Nurturing Global Leaders in Sustainable
Infrastructure Development

2021年度～2025年度 事業報告書

2026年3月

長崎大学総合生産科学研究科

はじめに

「大学の世界展開力強化事業」は、文部科学省の「大学の世界展開力強化事業～アジア諸国等との大学間交流の枠組み強化～」キャンパス・アジアプログラム（以下、キャンパス・アジア）は、日本・中国・韓国の3カ国の政府の合意により、大学間交流の推進を通してグローバル人材の育成と大学教育のグローバル展開力の強化を目指すプログラムです。

工学研究科では、2010年に『日中韓の大学間連携による水環境技術者育成－水環境の保全と持続的利用を支える技術の東アジアへの展開－』大学の世界展開力強化事業「キャンパス・アジア」の中核拠点に採択されました。さらに、2016年には「日中韓の大学間連携によるインフラストラクチャーを支える人材育成事業」（第2モード）に採択され、日中韓を中心としたアジア圏のインフラの整備と持続的利用の技術に関する教育・研究に取り組み、成果を上げていました。これまでに、延べ224名の学生が交流を行いました。これらの成果と交流経験、実績を踏まえ、地域の共同体を意味する「Asia for All」理念の下、アジア全域で質の保証を伴った大学間交流を活発化させるために、第2モードの日中韓の大学に、シンガポールの南洋理工大学とラオス国立大学も加わり、更に発展させる形の後継事業が、第3モードとして採択されました。事業の5年間で教職員間の交流や共同研究を推進する「国際コラボレーションラボ」を設立し、学生教育プログラムの中核を成す「ダブル・ディグリープログラム」、「ハイブリッド型短期留学プログラム」、「ASEAN 拡張型短期留学プログラム」など、多様な学生交流プログラムを毎年ブラッシュアップしながら実施しました。

2020年度新型コロナウイルス感染症 COVID-19 パンデミックが全世界で流行する中で本事業の第3モードが採択されました。海外留学が困難な状況が続く中、5大学間で試行錯誤を重ね、5年間で約264名以上の学生が本事業に参加することが出来ました。長崎大学全体の国際化に貢献しています。

「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」（中央教育審議会答申 2018.11）では、これからの社会の姿として「高等教育のグローバル化」が謳われ、取り組むべき方向性として「世界との高度で多様な頭脳循環」が示されています。今後ますます大学組織全体を貫徹した大学の国際化は加速されます。

本事業は2026年3月で終了を迎えますが、5年間の成果をもとに、5大学でインフラ人材育成を継続して実施することが合意されています。こうした長崎大学の国際的な取り組みが広く認知・評価されるとともに、ひいては日本と中国・韓国及びASEAN 諸国との間の互恵関係が適切かつ持続的に構築されることを強く願っています。

2026年3月 総合生産科学研究科長 河本 和明

目次

はじめに

1. 事業の概要	1
2. 事業の実施体制	4
3. 学生交流プログラム	6
3.1 日中韓ダブル・ディグリープログラム&短期互換留学プログラム	8
3.2 ハイブリット型短期留学プログラム	12
3.3 ASEAN 拡張型短期留学プログラム	14
3.4 その他の学生交流プログラム	16
3.5 国際コラボレーションラボ	17
3.6 学生支援体制	18
4. 広報関係	20
5. 同窓会組織	21
6. 事業の自己評価および文部科学省による評価	23
7. 今後の展開	24
付録1 事業関係者リスト	25
付録2 学生の声	32
資料編リスト (別冊)	52

1. 事業の概要

○事業名：

アジアの大学間連携による持続的社會基盤整備を支えるグローバル人材育成事業
Asia Intercollegiate Cooperative Project for Nurturing Global Leaders in Sustainable Infrastructure Development

○事業責任者： 総合生産科学研究科 河本 和明

○取組部局： 工学研究科[博士前期課程・博士後期課程] ※現総合生産科学研究科

○海外相手大学：山東大学、成均館大学校、南洋理工大学、ラオス国立大学

○背景・目的：

工学研究科は、2016年に日中韓の大学連携によるインフラストラクチャーを支える人材育成事業として「大学の世界展開力強化事業(第2モード)」に採択され、日中韓を中心としたアジア圏のインフラの整備と持続的利用の技術に関する教育・研究に取り組み成果を上げている。

地域の共同体を意味する「Asia for All」理念の下、アジア全域で質の保証を伴った大学間交流を活発化させるために、この取り組みを、日中韓以外のアジアの国・地域、特にASEAN諸国へ拡大することを目的とする。

○育成する人材像：

- ・アジア各国のニーズにマッチしたインフラ整備を持続的に技術面から支える国際的に活躍できる人材
- ・最新の技術や考え方を柔軟に取り入れ、指導的な立場からインフラ技術の発展に貢献できる人材
- ・他民族・多文化を理解し国際的なプロジェクトを共同で企画・実行できる人材
- ・キャンパス・アジアで形成されたコミュニティーを自発的かつ持続的に発展させることができる人材

○主な事業内容 (図 1.1)：

- ① 日中韓における大学院博士前期課程と博士後期課程のダブル・ディグリープログラム(以下DDプログラムと略記する。)

- ② 日中韓3か国の大学に加え複数の ASEAN 諸国の大学を含めてオンラインと留学を融合させた3カ月間のハイブリッド型短期留学プログラム
- ③ 日中韓のいずれかの大学と ASEAN 諸国の大学間で拡張的な短期留学プログラム
- ④ 「国際コラボレーションラボ」の設立による共同研究、国際共著論文及び人材育成事業の継続推進

○交流計画人数（表 1.1）：

表 1.1 長崎大学の交流計画人数

交流プログラム	形態	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度	2025年度	合計
日中韓ダブル・ ディグリー プログラム	派遣	0	3	2	3	2	10
	受入	1	4	5	4	5	19
ハイブリッド型 短期留学	派遣	0	5	8	8	8	29
	受入	0	12	20	20	20	72
ASEAN 拡張型 短期留学	派遣	0	0	0	1	1	2
	受入	0	0	0	1	1	2
合計	派遣	0	8	10	12	11	41
	受入	1	16	25	25	26	93

Asia Intercollegiate Cooperative Project for Nurturing Global Leaders in Sustainable Infrastructure Development

アジアの大学間連携による持続的社會基盤整備を支える グローバル人材育成プログラム



学生のニーズに対応した多様な交流プログラム



教育の質の保証を伴ったプログラム実施体制



若手研究者育成・学生交流を支援する仕組み



図 1.1 事業の概念図

2. 事業の実施体制

当事業は、長崎大学、中国の山東大学、韓国の成均館大学校、ラオスのラオス国立大学、シンガポールの南洋理工大学とコンソーシアムを組み、DD プログラム、ハイブリッド型短期交流プログラムと ASEAN 拡張型短期留学プログラムの3つのプログラムを柱に人材育成を行っている。図 2.1 に示す通り「インフラ人材育成コンソーシアム運営会議」を組織し、「DD 検討部会」、「ハイブリッド型短期留学検討部会」及び「ASEAN 拡張型短期留学検討部会」により各交流プログラムを企画・運営し、「教育の質保証評価委員会」で交流プログラムの適切な運営・教育の質の保証について検討した。また、円滑な事業運営を目的に、総合生産学域に「大学の世界展開力強化事業」推進委員会を設置するとともに、工学研究科内に「大学の世界展開力強化事業」運営員会を設定した。

表 2.1 に示す通り、「インフラ人材育成コンソーシアム運営会議」を年に 1 回開催し、開始場所は日中韓の大学がそれぞれ持ち回りで担当し、5 年間で計 5 回開催した。第 1 回インフラ人材コンソーシアム運営会議は、2022 年 3 月 24 日にオンラインで、第 2 回は 2023 年 2 月 27 日には長崎大学においてハイブリッド形式で実施した。第 1 回のコンソーシアム運営会議では、学生交流に関する覚書及び協定書を締結した。さらに、2023 年 6 月 28 日に南洋理工大学との学生交流に関する覚書及び協定書を締結し、ASEAN へ拡張するための大きな前進となった。これにより、2024 年に実施予定の ASEAN 拡張型短期留学プログラムは予定を早め、2023 年度中に工学研究科博士後期課程より 2 名の学生を派遣することができた。2023 年 11 月 13 日に韓国・成均館大学校において第 3 回を実施した。その成果として、2024 年 2 月に国際コラボレーションラボの設立に関する協定を締結できた。さらに、同年 7 月にラオス国立大学との MOA を締結しました。2024 年 12 月 6 日に中国・山東大学において第 4 回を実施し、最終のインフラ人材育成コンソーシアム運営会議は 2026 年 2 月に日本・長崎大学において実施した。

「教育の質保証」を伴った具体的な大学間交流及び学生交流プログラムを構築するために、定期的に（年に 2～3 回）「実務担当者会議」を開催することとしており、5 年間計 40 回ほど各大学の実務担当者間で協議を行った。（写真 2.1,写真 2.2）



写真 2.1



写真 2.2

事業の実施体制



図 2.1 実施体制・組織図

表 2.1 会議の実施日程（参考として一部抜粋を掲載）

日 時	実施内容		開催場所
	区分	活 動	
2021年12月2日	会議	事業推進にかかる事前検討会議	オンライン
2021年12月8日	会議	事業推進にかかる事前検討会議	オンライン
2021年12月15日	会議	中国教育部によるキャンパスアジア会議	オンライン
2021年12月27日	会議	事業推進にかかる事前検討会議&ハイブリッド型短期留学プログラム検討会議	オンライン
2022年3月24日	会議	第1回コンソーシアム運営会議&第1回実務担当者会議	オンライン
2022年4月21日	会議	事業推進にかかる事前検討会議	オンライン
2022年6月30日	会議	第2回実務担当者会議	オンラインと対面（日本）
2022年8月18日	会議	第3回実務担当者会議	オンライン
2022年8月24日	会議	事業推進にかかる会議	対面（日本）
2022年9月12日～13日	会議	事業推進にかかる打合せ	対面（シンガポール）
2022年9月15日～16日	会議	事業推進にかかる打合せ	対面（韓国）
2023年2月27日	会議	第2回コンソーシアム運営会議&第4回実務担当者会議	オンラインと対面（日本）
2023年2月27日	会議	国際コラボレーションラボ立上げ&第1回国際シンポジウム	オンラインと対面（日本）
2023年4月7日	会議	事業推進にかかる打合せ	オンライン
2023年4月20日	会議	事業推進にかかる打合せ	オンライン
2023年7月26日	会議	第5回実務担当者会議	オンラインと対面（シンガポール）
2023年8月12日～15日	会議	事業推進にかかる打合せ	対面（中国・韓国）
2023年11月13日	会議	第6回実務担当者会議&第3回コンソーシアム運営会議 1st Research Presentation Session - International Collaboration Laboratory	オンラインと対面（韓国）
2024年1月26日	会議	事業推進にかかる打合せ	対面（日本）
2024年3月21日	会議	事業推進にかかる打合せ	対面（ラオス）

3. 学生交流プログラム

2021年12月に本事業は採択が決定した後、5大学において協力体制を整備し、第1回目及び第2回目の「インフラ人材育成コンソーシアム運営会議」において、それぞれ本事業に関する学術交流協定及び学生交流に関する覚書、DD制度（博士後期課程）に関する覚書及び実施要項が締結した。これにより、3つの学生交流プログラムの基礎が構築された。

2022年2月に試験的に日中韓の3大学において、「日中韓オンライン学生交流プログラム」を実施した。その後、2022年4月からは本格的に「日中韓DDプログラム」、「ハイブリット型短期留学プログラム」をスタートさせ、2023年から「ASEAN拡張型短期留学プログラム」の実施時期を早め学生派遣をスタートした。事業開始当初は新型コロナウイルス感染症の影響を強く受けながらも、計画に沿って学生交流プログラムを着実に実施し、これまでの5年間で延べ264名の学生が交流プログラムに参加し、計画の154名を大幅に上回った（表3.1）。また、長崎大学の派遣・受入学生数は255名に達し、計画の134名を大幅に上回った（表3.2）。

表 3.1 5大学の学生交流数

FY	Plannign	Achievement	Achievement				
			Institution	Total	Total		
DD(JCK)	47	14	NU-SDU	NU-SKKU	SDU-SKKU	—	—
			10	2	2	—	—
Credit(JCK)	—	11	NU-SDU	NU-SKKU	SDU-SKKU	—	—
			1	10	0	—	—
Hybrid	101	161	NU	SKKU	SDU	NUOL	NTU
			48	42	63	7	1
Symposium	—	52	NU	SKKU	SDU	NUOL	NTU
			19	19	11	0	3
Asean	6	8	NU-NUOL	NU-NTU	—	—	—
			3	5	—	—	—
Other	—	18	NU-SKKU	SDU-SKKU	SKKU-NUOL	—	—
			13	4	1	—	—
Total	154	264	94	82	77	7	4

表 3.2 長崎大学の派遣と受入の学生数

交流プログラム	形態	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度	2025年度	合計
日中韓ダブル・ ディグリー プログラム	派遣	0	0	2	0	0	2
	受入	1	3	3	2	1	10
単位互換 留学プログラム	派遣	—	2	—	3	3	8
	受入	—	0	—	0	2	2
ハイブリッド型 短期留学	派遣	6	8	8	12	14	48
	受入	23	22	20	24	24	113
ASEAN 拡張型 短期留学	派遣	—	—	2	3	0	5
	受入	—	—	0	1	2	3
国際 シンポジウム	派遣	—	12	—	—	7	19
	受入	—	20	—	—	15	35
その他 学生交流	派遣	—	0	0	0	2	2
	受入	—	1	6	1	0	8
合計	派遣	6	22	12	18	26	84
	受入	24	46	29	28	44	171
	合計	30	68	41	46	70	255

3.1 日中韓ダブル・ディグリープログラム&短期互換留学プログラム

本事業の第2モードでは、博士前期(修士)課程の「ダブル・ディグリー制度に基づく長期留学」では、総計22人の学生交流の実績をあげた。その過程で、アジア各国のニーズにマッチした持続的・社会的インフラ整備を支える国際的に活躍できる人材を育成するには、DD制度が最も効果的であり、さらには、参加学生によるアンケートでも「単位互換制度に基づく短期留学に比べ、DD制度のニーズが高い」ことが判明した。第3モードでは、博士前期(修士)課程に加え博士後期(博士)課程のDDに基づく長期留学を主とするプログラムを構築した。博士前期課程の日中韓DDプログラムは、第2モードで構築した2年間(自国1年、留学国1年)のプログラムであり、博士後期課程のDDプログラムは、5年間(自国3年、留学国2年)のプログラムである。プログラムの詳細は、「インフラ人材育成コンソーシアム会議」傘下の「DD検討部会」で議論し、3つの大学合意の下で実施した。

日中韓DDプログラムは学位取得を目的とするため、派遣先の大学において正規学生として2年間の在籍を有し、必要単位数を取得するとともに、研究活動を実施してそれぞれの大学に修士論文を提出し、試問会を経て修士の学位が授与される。学生派遣においては、3大学間で設定された入学スケジュールに基づき、それぞれの大学における選抜基準に基づき厳格に派遣学生を推薦してきた。推薦された学生は、受入れ大学において入学試験を実施し、出願資料の提出やオンラインでの面接試験などを経て留学が決定される。3大学で開催する担当者会議等においては、DD学位取得スケジュールや修士論文の指導方法、研究活動の実施方法、開講科目等について鋭意協議を行ってきた。さらに、スムーズな留学及び研究活動が実施できるように、学生の渡航前から双方の指導教員に対して研究テーマの事前指導等も綿密に相談できるシステムを構築した。また、帰国後はDD留学後発表会を実施し、その成果の発表の場を設けた。

博士後期課程を対象としたDDプログラムは、当初2021年度に制度設計を終え、2022年度に受入れを開始する予定であった。学生の強い希望もあり、予定を半年間早めて、2021年度中に新たに博士後期課程を対象としたDDプログラムの協定を締結し、これに基づいて山東大学から博士後期課程のDDプログラム学生を1名受入れた。そのた、長崎大学の受入実績として、2022年度及び2023年度には3名ずつ、2024年度には2名、2025年度には1名を工学研究科博士前期課程総合工学専攻の正規生として受入れた。受入れた留学生を対象とした9月入学前教育プログラムの一環として、また、DDプログラムで受入れた留学生を対象として県内・県外のインフラ現場視察を実施したが、学生による感想レポートでも貴重な体験となったことが確認された(写真3.1)。とりわけ、日本でしか経験することができないこれらの体験を通して、研究分野に対する留学生の興味・関心、インフラ整備に関する知識等を大いに学ぶことが出来たものと判断される。

続けて長崎大学の派遣実績として、2023年度には成均館大学校へ工学研究科(社会環境デザイン工学コース、構造工学コース)から2名の大学院生を派遣することができた。帰国後、成均館大学校で履修した単位を長崎大学の単位として認定も行った。

表3.1.1に長崎大学の派遣および受入学生数を示す。受入学生数は計画の19名に対して10名、派遣学生数は計画の10名に対して2名となっており、いずれも当初計画を下回る結果となった。

この要因として、事業期間初期における新型コロナウイルス感染症の影響により、渡航制限や入国手続の不確実性が長期化したことが挙げられる。また、感染症収束後においても、短期間で計画どおりの派遣・受入規模を回復することが難しく、プログラム再開後の調整期間が必要となったことも影響したと考えられる。実際に 2022 年度に DD プログラム派遣の学生募集を行い、留学を希望する学生がいたが、家族の新型コロナウイルス感染症拡大に係る懸念により派遣することができなかった事例があった。加えて、特に近年の急激な円安は心理的なハードルも上げていると思われる。就職活動とのタイミング問題や学生個々の進路計画等の要因も重なり、参加機会の確保が限定的となった。表 3.1.2 に事業期間中の日中韓 DD プログラムの全体の学生交流人数を示す。

そこで、事業開始当初は新型コロナウイルス感染症の影響により長期留学の実施が困難であったことから、大学間で協議を行い、代替的措置として第 2 モードで実施していた単位互換に基づく短期留学プログラムを再度実施することを合意した。これにより、学生交流の機会を確保し、教育連携の継続を図った。その結果、表 3.3.2 に示すとおり学生交流数は増加に転じ、長崎大学からの派遣学生数も回復傾向を示し、8 名まで増加した。派遣先の成均館大学校での英語による授業、多国籍学生との交流や海外生活を通して、学生は英語力の向上を図るとともに、他国の文化にも密に触れることができ、本事業が育成を目指す「グローバルに活躍できる高度専門職業人として必要な言語力を身につけた人材」として能力と経験を培う機会に繋がった。これにより、交流規模の段階的な回復と教育連携の実質的な再活性化が確認された。なお、帰国後には、成均館大学校で履修した単位の長崎大学単位としての認定および TOEIC 受験を実施した。本事業では、派遣学生に対する支援は、留学前のみならず留学後においても体系的にきめ細かく実施した。学生には安心かつ適切な教育的支援を十分に提供したと言える。

DD プログラムでは、第 2 モードで構築した日中韓の 3 大学で得意とする分野のインフラに関するインフラ維持管理の共通科目も第 3 モードでも継続し、すべての留学生の修了に必要な修了要件とした。これまでの 5 年間で延べ 17 人の教員が交流を行い、27 科目の講義を開講した（図 3.3.3）。当該のインフラに関する維持管理の共通科目は、共通のルールの下で「教育の質の保証」に不可欠であることを 3 大学が相互に認識した上での開講となっている。

表 3.1.1 日中韓ダブル・ディグリープログラム学生交流の実績数（長崎大学）

Program Schedule		Category	Country	Financial Year					total	
				2021	2022	2023	2024	2025		
Double Degree Program	Master	Inbound	SDU		2(3)	2(3)	2(2)	2(1)	8(9)	16(9)
			SKKU		2(0)	2(0)	2(0)	2(0)	8(0)	
		Outbound	SDU		1(0)	1(0)	1(0)	1(0)	4(0)	8(2)
			SKKU		1(0)	1(2)	1(0)	1(0)	4(0)	
	Doctor	Inbound	SDU	1(1)				1(0)	2(1)	3(1)
			SKKU			1(0)			1(0)	
		Outbound	SDU				1(0)		1(0)	2(0)
			SKKU		1(0)		0(0)		1(0)	

表 3.1.2 日中韓ダブル・ディグリープログラム学生交流の実績数（日中韓3大学）

Institution \ FY	2021	2022	2023	2024	2025	Total
Shandong University (SDU)	1	4	3	2	2	12
Nagasaki University (NU)	0	0	2	0	0	2
Sungkyunkwan University (SKKU)	0	0	0	0	0	0
Total	1	4	5	2	2	14

表 3.3.2 単位互換留学プログラムの学生交流の実績数（日中韓3大学）

Institution \ FY	2021	2022	2023	2024	2025	Total
Shandong University (SDU)					1	1
Nagasaki University (NU)		2		3	3	8
Sungkyunkwan University (SKKU)		1			1	2
Total	0	3	0	3	5	11

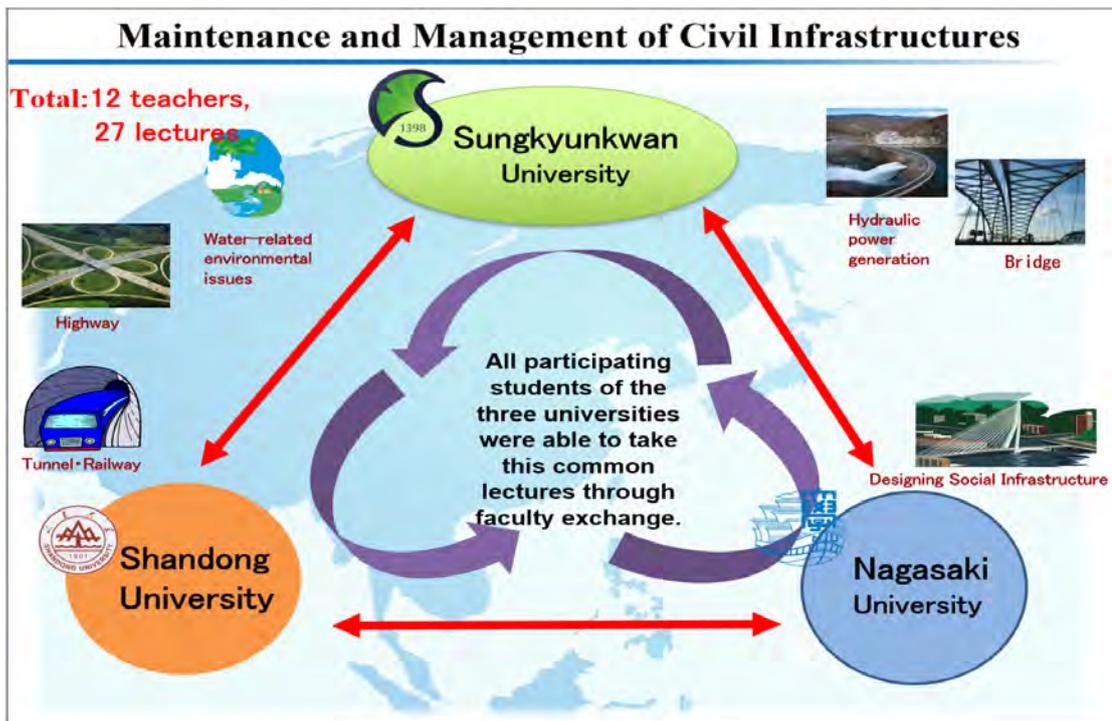


図 3.3.3 日中韓共通科目 Maintenance and Management of Civil Infrastructures



写真 3.1 日中韓ダブル・ディグリープログラム活動状況 (長崎大学)

3.2 ハイブリット型短期留学プログラム

アジア諸国の社会的背景や文化を理解できるグローバルな視点を有した人材を育成することを目的に、日中韓の3大学に加え複数のASEAN諸国の大学を含めてオンラインと実渡航留学を融合させた3ヶ月間のハイブリット型短期留学プログラムを設計し実施した。プログラム期間は、渡航前オンライン交流1ヶ月、実渡航留学1ヶ月(日本:1週間、中国:1週間、韓国:1週間、ASEAN諸国:1週間)、渡航後オンライン交流1ヶ月の計3ヶ月として計画した。

本プログラムの特徴は、各国の文化的・社会的背景を理解し、それぞれの国が有するインフラに関する諸問題に対する問題解決型のPBL形式とする。渡航前オンライン交流では、各国の文化的・社会的背景や語学およびそれぞれの国のインフラに係る諸問題について講義形式で実施する。実渡航留学期間では、日中韓とASEAN大学の教員に加え、参加学生とキャンパス・アジア同窓生と共に、交流プログラムを企画運営し、直に各国の文化や社会に触れ、各国が抱えるインフラに関する背景について理解を深めた。渡航後オンライン交流会では、数グループに分かれ各国から提示されたインフラに関する諸問題について調査・分析および問題解決手法の提案をPBL形式で実施した。

DDプログラムと同様に、2022年度に実施予定であったが、プログラムへの参加の足掛かりとなるよう、学生間の交流の促進、留学に対する学生の意欲向上を目的で、実験的な運用として、予定を早め2021年度中に日中韓オンラインプログラムを実施した。これにより、オンラインプログラムの実施に関わる諸課題等を整理することができた。2022年度に本格的に実施したプログラムでは、5大学から計30名の学生が参加し、34回の講義がオンラインで実施された。なお、2022年は新型コロナウイルス感染症拡大のため、当初の予定通りの実渡航が困難であったため、オプション的に実渡航は長崎大学と成均館大学および南洋理工大学で実施した。当初の計画では4か国であったが、最終的には5か国の学生が参加した。本プログラムは非常に人気が高く、当初の予定よりも参加希望者が多く、目標人数を上回る実績となった。2023年度は山東大学が主催校として、2024年度は成均館大学が主催校として、最終年度は長崎大学が主催校としてプログラムを実施した。参加学生が長崎大学、成均館大学、山東大学の3か国を訪問し、2か国以上の留学が特徴である本プログラムの目標を達成することができた。特に長崎大学は、毎年度、ラオスおよびシンガポールへも学生を派遣し、結果として4か国への学生派遣を実現した。シンガポールにおいては、企業でのインターンシップを実施するとともに、本事業の同窓生が所属する企業を訪問するなど、現地における実務的な学修機会の充実を図った。これにより、「社会的背景や文化を理解できるグローバルな人材を育成する」ことの目的に達したといえる。プログラム参加学生による成果発表会を実施し、終了後にアンケート調査もあわせて行った。5大学間共同による交流プログラム認定書や発表優秀賞証書も発行した(写真3.2)。

本プログラムのもう一つの特徴として、第2モードのキャンパス・アジア同窓生も参加・協力し、学生参加型で実渡航内容の企画・運営を実施した点が挙げられる。このハイブリット型短期留学プログラムには延べ同窓生30名以上が企画・運営に参加し世代を超えた交流が行われた。なお、本プログラムに参加した学生のうち2名は、DDプログラム(博士前期課程)で成均館大学

校へ留学し、学位審査を経て学位記及び DD 認定書が授与された。残念ながら、参加学生のうち 1 名は、DD プログラムへの参加希望だったが、諸事情により短期留学に参加したが、ハイブリッド型短期交流プログラムは、更なるプログラムへの「呼び水的な効果」として派遣学生の増加に貢献できたと言える。本プログラムは他の交流プログラムへの参加意欲に喚起したと言え、実施する他のプログラムへもよい影響を与え、波及効果が高いと考えられる。

表 3.2.1 に長崎大学の学生交流の実績数を示す。5 年間で受入学生数は計画の 73 名に対して 113 名、派遣学生数は計画の 29 名に対して 48 名となっており、いずれも当初計画を大きく上回る結果となった。さらに、表 3.2.2 のとおり 5 大学間での参加学生は延べ 161 名に達し、計画の 101 名より大幅に上回った。

表 3.2.1 ハイブリット型短期留学プログラムの学生交流の実績数（長崎大学）

Category	Country	Financial Year					total	
		2021	2022	2023	2024	2025		
Inbound	SDU	(17)	5(12)	8(11)	8(12)	8(11)	29(63)	72(113)
	SKKU	(6)	5(7)	8(8)	8(10)	8(11)	29(42)	
	NTU		2(1)	2(0)	2(0)	2(0)	8(1)	
	NUOL		(2)	2(1)	2(2)	2(2)	6(7)	
Outbound	SDU SKKU NTU NUOL	(6)	5(8)	8(8)	8(12)	8(14)	29(48)	

表 3.2.2 ハイブリット型単位互換プログラムの学生交流の実績数（5 大学）

Institution \ FY	2021	2022	2023	2024	2025	Total
Shandong University (SDU)	17	12	11	12	11	63
Nagasaki University (NU)	6	8	8	12	14	48
Sungkyunkwan University (SKKU)	6	7	8	10	11	42
National University of Laos (NUOL)		2	1	2	2	7
Nanyang Technological University (NTU)		1				1
Total	29	30	28	36	38	161



長崎大学における交流活動



成均館大学における交流活動



南洋理工大学における交流活動



ラオス国立大学における交流活動

写真 3.2 ハイブリット型単位互換プログラムによる交流状況

3.3 ASEAN 拡張型短期留学プログラム

ハイブリッド型短期留学プログラムに参加した ASEAN 諸国の大学と、日中韓のいずれかの大学間における短期留学プログラムを、第 2 モードで構築した「単位互換制度に基づく短期留学」や「インフラに関する短期サマースクール」で得られた経験をもとに 2023 年度に構築し、2024 年度から実施する計画であった。ハイブリッド型短期留学プログラムの実施の成功や、大学間の実施体制の連携強化及び、2023 年 6 月 28 日に南洋理工大学との学生交流に関する覚書及び協定書を早期に締結するできたことから、予定を早め 2023 年度から実施することが可能となった。

その結果、長崎大学からは、2023 年度に 2 名、2024 年度に 3 名の計 5 名の学生をシンガポール南洋理工大学に学生を派遣することができた。派遣先では、南洋理工大学における研究活動やラボ視察見学に加え、企業でのインターンシップを約 3 か月間実施した。研究活動においては、主にシンガポールの都市インフラを対象とし、交通システム、排水施設、持続可能な開発に関す

る取組に焦点を当てた分析を行い、先進的なインフラ整備に関する専門的知識を習得した。また、本事業の同窓生が所属する大成建設が施工を担当する MRT 建設現場の視察を通じ、シンガポールならではの熱帯環境におけるインフラ建設技術および維持管理手法への理解を深めるとともに、建設上の課題とその対応策に関する実践的知見を得ることができた。(写真 3.3) 帰国後は、派遣学生に成果報告書の提出を求めるとともに、長崎大学における卒業要件科目「学外研究」に係る 1 単位の単位認定を行った。現地における実務的学修機会を体系的に提供したことにより、「アジア各国のニーズに対応した持続的インフラ整備を技術面から支える国際的に活躍できる人材を育成する」という本事業の目的の達成に寄与したといえる。

一方、受入に関しては、2024 年 7 月末にラオス国立大学との学術交流協定の締結に基づき、2024 年度に 1 名、2025 年度に 2 名の大学院生を受け入れた(表 3.3.1、3.3.2)。受入学生は、インフラ分野に関する特別講義を履修するとともに研究室に配属され、研究活動を通じて本学学生との学術交流を実施した。また、インフラ分野の教員も招聘し、配属研究室における学生との交流および研究指導を実施した。さらに、専門講義に加え、日本語講義、日本文化体験、インフラ関連施設の現場見学等を組み合わせた多面的な教育プログラムを提供した。(写真 3.3) 帰国後にはアンケート調査を実施し、教育効果の把握を行った。

これらの取組により、本学学生は同世代の海外学生との交流を通じて国際感覚を涵養するとともに、英語によるコミュニケーション能力が向上し、グローバルな視点を得ることができたと考えられる。加えて、本プログラムは ASEAN 地域への教育連携拡張に向けた重要な基盤整備として位置付けられ、地域的展開の観点からも大きな前進となった。

表 3.3.1 ASEAN 拡張型短期留学プログラムの学生交流の実績数 (長崎大学)

Program Schedule	Category	Country	Financial Year					total	
			2021	2022	2023	2024	2025		
ASEAN Exchange Program	Inbound	NUOL				1(1)	1(2)	2(3)	4(8)
	Outbound	NTU			(2)	1(3)	1(0)	2(5)	

表 3.3.2 ASEAN 拡張型短期留学プログラムの学生交流の実績数 (5 大学)

Institution \ FY	2021	2022	2023	2024	2025	Total
Shandong University (SDU)						0
Nagasaki University (NU)			2	3		5
Sungkyunkwan University (SKKU)						0
National University of Laos (NUOL)				1	2	3
Nanyang Technological University (NTU)						0
Total	0	0	2	4	2	8



南洋理工大学における交流活動



大成建設におけるインターンシップ活動



長崎大学における受入学生の交流活動



写真 3.3 ASEAN 拡張型短期留学プログラムによる交流状況

3.4 その他の学生交流プログラム

事業期間中、5大学間において上述以外の学生交流プログラムも不定期に実施した。長崎大学は韓国成均館大学及びラオス国立大学から特別研究学生として11名受け入れ、韓国成均館大学には2名の研究学生を派遣した。

受け入れのプログラムは、主に特別講義・現場見学・研究室活動等の内容で構成される。研究室活動では、社会環境デザイン工学コースの水圏環境研究室と土木構造研究室に配属され、現地調査、実験、データ解析などの実習を行った。特別講義や実習のほか、日本文化への理解を深めるため、日本語レッスン、日本料理の調理実習、本学のキャンパス・アジア同窓生との交流会なども行われた。プログラム終了時にはすべての参加学生による成果発表会を行った。プログラムに関するアンケートによれば、プログラムに対する満足度はおおむね高く、他の学生へも学術交流及び学生交流への参加を勧めたいとする回答があった。将来の留学に対する興味を示す学生もあり、各大学の多くの学生にキャンパスアジア・プログラムが知られ、参加する学生が増えてく



写真 3.4 その他の学生交流プログラムによる交流状況

ることを期待したいできる。(写真 3.4)

3.5 国際コラボレーションラボ

国際コラボレーションラボは、DD プログラムの学生に対する学術交流や教員間の共同研究を促進し、将来の日本とアジア関係を見据え、各国間の連携強化の観点から、各国間の懸け橋となる高度専門人材やリーダーの育成を目的としている。オンラインによる交流や実渡航による交流を併用しながら、研究室ツアー、国際シンポジウムや研究発表会を開催する計画しており、2021 年度には長崎大学学内において、「国際コラボレーションラボ」専用部屋を設置し、本格的に活動を開始した。活動の一環として、2022 年 2 月に第 1 回国際シンポジウムが開催し、各大学の教員を含む延べ 60 人以上が参加した (写真 3.5.1)。当日は、2 部屋に分かれて 23 名の学生が、対面あるいはオンライン形式で研究成果を発表し、活発な討議が行われた。また、同時にポスター発表も開催され、10 名の学生の研究成果が特設 HP 上でオンライン配信された。2025 年 11 月には、第 2 回国際シンポジウムをハイブリッド形式で開催し、20 名の学生が参加した (写真 3.5.2)。学生の参加人数の詳細は表 3.5 に示すとおりである。特に長崎大学の参加学生にとって、英語による国際的な発表の機会は、国際的な研究発信力の向上に資する貴重な経験となった。

本事業の国際シンポジウムは、在籍中の学生と同窓生が協力して企画・運営する点を主な特徴としている。事業内容や各種プログラムの取組の紹介、研究成果の発表等を通じて、参加者のコミュニケーション能力および企画力の養成が図られるとともに、グローバルな視点の涵養にもつながっている。

また、2023 年度および 2024 年度の人材育成コンソーシアム運営会議では、大学間の教員による研究発表が実施され、各大学の研究内容やリソースの紹介など、貴重な情報交換の機会となった。さらに、会議においては国際コラボレーションラボの運用に向けた進捗状況が報告され、日中韓による国際コラボレーションラボに関する覚書について協議を行い、2024 年 1 月に長崎大学・山東大学・成均館大学校の 3 大学による調印を実施した。これにより、今後は共同研究の実施および情報共有を通じて、本事業の継続的な推進が期待される。加えて、学内にとどまらず企

業等へも積極的に開催案内を行い、事業内容や成果の対外発信を体系的に実施した。これにより、本事業の認知度向上と連携拡大が促進され、外部機関との協働可能性の拡張にもつながっている。



写真 3.5.1 第1回国際シンポジウムの開催様子



写真 3.5.2 第2回国際シンポジウムの開催様子

表 3.5 国際シンポジウムの学生交流の実績数（5 大学）

Institution \ FY	SDU	NU	SKKU	NUOL	NTU	Total
1st Symposium	7	12	11	0	2	32
2nd Symposium	4	7	8	0	1	20
Total	11	19	19	0	3	52

3.6 学生支援体制

各大学において、学生の派遣及び外国人学生の受入のための環境整備を精力的に実施した。派遣する学生に対しては、留学先の情報提供や語学力アップの講義等を実施した。また、受け入れ

学生に対しては、指導教員とチューターを配置し、現地でのトラブル発生時の対応を支障なく行った。

特に長崎大学では、本事業に対応するため、学長直轄の組織として、研究・国際、教学担当の各理事、国際交流担当学長特別補佐及び工学研究科長等を中心とする全学的な推進体制を引き続き運用するとともに、本事業にかかる情報を収集し、進捗情報の共有化を図ってきた。また、事務局を工学研究科内に設置し、学内のグローバル連携機構や学生支援部等と連携して、本事業関係者が円滑な意思疎通を図れるような連携体制を構築した。さらに、入試事項、教務事項及び国際交流の実施に関するノウハウ等を有する既存の事務職員とも随時情報共有を行うと共に、必要に応じ担当者会議に参加することとし、大学全体の事務職員の知識と能力の向上を図った。

長崎大学では派遣学生に対して学内説明会を毎年数回にわたり開催することによって、学生は、各大学への派遣スケジュールや出願書類、経済支援（奨学金、宿舍）等の内容を詳しく事前に確認することができ、安心した状態で留学の決断が可能となった。さらに、ビザ取得手続きのサポート、渡航前オリエンテーション、国際コーディネーターによる中国語及び韓国語の初級レベルの語学研修指導も行った。派遣学生は全員「TOEIC テスト」を受験し、受験料の補助や「英語スキルアップ講座」も通年開催し、英語力の向上に努めてきた。留学中にも国際コーディネーターと指導教員による 24 時間の生活相談及びサポートの体制を整えた。とりわけ、学生全員が危機管理サービス OSSMA への加入が義務付けられていた。

受け入れ学生に対しては、学術交流協定に基づく検定料、入学料及び授業料の免除はもとより、留学前から宿舍手配・提供や在留資格取得のサポート、研究室配属及び指導教員やチューターの配置など適切な支援体制を整えるとともに、来日後も日本語講座の聴講や国際コーディネーターによる生活全般の 24 時間サポート、帰国前には成果発表会及び修了証書授与式も開催した。さらに、講義開始前の 9 月中には事前教育プログラムや日本のインフラ建設現場の視察を実施することによって、いち早く日本の大学の仕組みを把握し、日常生活における懸念事項を低減させることに努めた。日本人学生とともにインフラ整備の現状と課題を把握してもらうことで、学生自身の修士論文に関連した研究と日常生活の両面でグローバル化を肌で感じてもらうことができた。

さらなる学生支援の取り組みとして、プログラム参加学生に対して TOEIC 受験料の補助、学部生・大学院生を対象にした「英語スキルアップ講座」の開催（通年）、大学院講義の英語化を順次進めている（図 3.6）。

とりわけ英語スキルアップ講座では、プログラム参加学生に対し留学後のアンケート調査を行うとともに、学生が強化したいスキルについての聞き取りを行い、その結果を踏まえつつ講座内容の改善を図ってきた。2022 年度からは、TOEIC 受験対策のみならず、英語ヒアリング強化練習や動画視聴（NHK world, Coursera, YouTube 素材等）を通しての理解力の向上、さらに学生が積極的に発言し実践的な英会話スキルの向上に取り組めるようなレッスン内容・環境の充実を目指してきた。TOEIC は留学前および留学後の 2 回で実施し、留学の効果を検証した。これら英語力強化の取り組みにより、第 2 モードでは 500 点以上を超えた学生が 33%程度であったのに対し、第 3 モード（2026 年 1 月時点）では 76%に増え、そのうち 600 点以上が 60%にも達した（図 3.6）。留学先で教育を受け研究をスムーズに実施できるレベルに達しつつある。

- ◆ 年間通して、英語スキルアップ講座を開催
- ◆ 大学院講義の英語化（社会環境デザイン工学コース、水環境科学コース）
- ◆ 大学内の様々な英語に関わるプログラムへの参加の呼び込み、等

第2モードTOEIC点数

NO.	留学種別	学年	留学前
1		M1	575
2	短期留学	M1	560
3		M1	675
4		M1	585
5		B4	430
6		B4	IP360
7		B3	335
8		B3	380
9	学マースクール	B3	575
10		B3	450
11		B3	375
12		B3	495
13	短期留学	M1	435
14		M1	235
15		M1	315
16	ダブル・ディグリー	M1	675
17		B3	475
18		B3	350
19		B4	330
20		B4	250
21	学マースクール	B3	450
22		B3	265
23		B3	680
24		B4	330
25		B3	665
26		M1	450
27	短期留学	M1	505

第3モードTOEIC点数
(2021~2022)

No	派遣先	プログラム	TOEIC点数
1			925
2			555
3	シンガポール・南洋理工大 韓国・成均館大		505
4		ハイブリッド型短期留学プログラム	690
5			510
6			740
7	韓国・成均館大		-
8			450
9	韓国・成均館大	短期留学プログラム	610
10			845



クリア率の向上
33% ⇒ 80%



図 3.6 英語スキル講座の開催と英語力向上効果

4. 広報関係

学内外に向けた本事業の情報公開および成果の普及を目的として、第2モードから本事業専用ホームページを構築・運用してきた。事業採択後は、第3モード専用のホームページ（日本語版・英語版）を新たに開設し、発信基盤の強化を図った。また、事業紹介動画の制作、SNSによる継続的な情報発信、パンフレットの作成、ならびに事業年度報告書の作成を実施し、多面的かつ体系的な広報活動を展開した。

パンフレットについては、事業採択校へ郵送により配布し、確実な情報共有を図った。さらに、事業期間中に実施した学生交流プログラムの成果発表会および国際シンポジウムについては、採択校に加え、学内の関連事業担当者や関係企業にも広く情報提供を行い、参加を積極的に呼びかけた。

これらの取組により、本事業の認知度向上および成果の社会的共有が着実に進展し、学内外の関係機関との連携基盤の拡充にも寄与した。以上のように、本事業の周知および成果普及は広範かつ効果的に実施されている（図 4.1）。

広報・情報発信

HP、Facebook、YouTube等での情報発信



図 4.1 広報・情報発信

5. 同窓会組織

大学の世界展開力強化事業の第2モードで設立した同窓会には、現在約100名以上が所属しており、年に数回、同窓会員に向けた継続的な情報発信を行っている。本同窓会は、主に第2モードで採択されてから継続で実施している「DDプログラム」および「単位互換留学プログラム」に参加した中長期の学生を中心に構成されている。

本事業期間中は、新たにプログラムへ参加した学生に対して同窓会への入会を積極的に奨励し、同窓生間の継続的な交流を促進するとともに、同窓生同士が国際的な共同プロジェクトを実施できるプラットフォームの整備を進めた。

さらに、本同窓会は、交流プログラムへの講師としての同窓生の参加や、ハイブリッド型短期留学プログラムの企画・運営への参画を調整する窓口として機能している。特にハイブリッド型短期留学プログラムにおいては、事業開始直後の2022年度以降、毎年度、対面やオンライン形式で同窓生を招聘し、これまでの留学経験やその後の進路等について参加学生との意見交換を実施してきた。これにより、参加学生が留学の意義や将来のキャリア形成について具体的な理解を深める機会が継続的に提供された。さらに、2026年2月に長崎大学において同窓生交流会を実施し、日中韓から10名の同窓生が参加した。交流会では各大学から1名ずつ発表が行われ、「留学生活

の振り返り」「留学経験に対する評価」「留学経験が現在の職業・キャリアに与えた影響」等を主なテーマとして活発な意見交換が行われた。

交流を通じて、留学経験の長期的な教育的・職業的効果が共有されるとともに、同窓生間の相互理解とネットワークの強化が図られた。これまでに、ハイブリッド型短期留学プログラムおよび国際シンポジウム等において、延べ約 70 名の同窓生が実際に企画・運営に参画し、世代を超えた幅広い交流の実現に寄与した（写真 5.1）。本事業で掲げる「キャンパス・アジアで形成されたコミュニティを自発的かつ持続的に発展させることができる人材を育成する」の人材像にマッチしたといえる。

これらの取組により、同窓会は単なる交流組織にとどまらず、プログラム参加者が修了後に教育・研究・運営へ再参画する仕組みを備えた人材循環モデルとして機能していると考えている。すなわち、学生として参加した人材が同窓生としてネットワークに蓄積され、その経験や専門性を活かして後続の教育活動や国際事業運営に関与することで、知識・経験・人的資源が継続的に還流する好循環が形成されている。本事業の持続的発展を支える基盤として有効に機能しており、事業成果の長期的定着に大きく寄与していると評価できる。



写真 5.1 同窓会組織活動状況

6. 事業の自己評価および文部科学省による評価

本事業の執行においては、教育の質の保証を伴う大学間交流の枠組みの構築が最も重要であるとの認識が、参画大学間で共有されている。このため、コンソーシアム内に「教育の質保証評価委員会」を設置し、毎年度、コンソーシアム会議と併せて開催することで、事業の実施状況に関する定期的な評価および運営上の課題に関する協議を継続的に行った。また、本事業で実施するすべての交流プログラムにおいて、派遣・受入学生を対象としたアンケート調査を実施し、その結果を踏まえた事業評価および改善措置を講じるなど、継続的改善の仕組みを整備した。

事業2年目にあたる2022年度末には、事業報告書（日本語版・英語版）を作成し、ホームページ上で公開した。さらに、計画どおり事業2年目終了時点において、事業報告書に加え、インフラ人材育成コンソーシアム運営会議および各プログラム検討会議の議事録、学生の成果発表レポート、アンケート集計結果等を活用し、事業実施者による体系的な自己評価を実施した。加えて、事業3年目の2024年には外部評価を実施し、第三者の視点から事業の妥当性および有効性の検証を行った。

さらに、2023年10月26日には、中間評価調書に基づき、大学の世界展開力強化事業の2023年度中間評価がWeb面接形式で実施された。いずれも事業の実施報告書および自己評価報告書、外部評価報告書を提出している。

中間評価結果は、「①国際的な人材育成の取り組みが堅調になされている。②学生交流はおおむね計画通りに行われており、コロナ禍においてもオンラインの活用等によって、積極的な交流を行ってきたことは評価できる。③質の保証を伴った魅力的な大学間交流の枠組み形成に向けた、学術交流協定や学生交流に関する覚書の締結や、博士後期糧を対象にした日中韓 DDP に関する実施要項の締結は評価できる。④学生の受入/派遣のための環境整備も十分に整備され、継続してプログラムを運営していく未投資が立っていることは評価できる。」など、高い評価を得ている。一方で、アジア各国のニーズにマッチしたインフラ整備を技術面から支えることができる国際的な人材に関連するコンピテンシーやそれらの育成に必要なルーブリック等の体系的な整備を早期に行うことが望ましい、また、海外でのインフラ事業関連の実務に必要な語学力（英語）を向上させるための、更なる取り組みを行う必要があるとの指摘を受けた。

令和6年3月11日に実施した外部評価委員会では、外部評価員4人と共に事業計画は確実に実施されていることが確認され、「学生交流プログラムでは学生のニーズに則ったプログラムを柔軟に実施していることも評価できる。さらに、教育の質を保証するためにコンソーシアム会議を定期的に開催すると共に「教育の質保証評価委員会」を中心とする大学間の緊密な連携、各大学での学位審査の実施、アンケート実施を通じた参加者のフィードバック等の取り組みも行われており、事業終了後も確立した教育プログラムを継続していくための組織づくり等についても高く評価できる。」と評価された。

これらの枠組みにより、事業計画から運営に至るまで、定期的に「教育の質を保証」し、教育の質の向上を図ってきた。本事業では自己評価・外部評価・中間評価を組み合わせた多層的な質保証体制により、教育の質の継続的向上と事業運営の適正化を体系的に推進してきたと言える。

7. 今後の展開

令和3年度(2021年度)から開始した大学の世界展開力強化事業「アジアの大学間連携による持続的社會基盤整備を支えるグローバル人材育成事業」は、長崎大学、山東大学、成均館大学校、南洋理工大学、ラオス国立大学の5大学の連携により、積極的なグローバル人材育成を推進し、令和8年(2026年)3月末日をもって事業期間の終了を迎える。

初年度にはインフラ人材育成コンソーシアム運営会議を立ち上げ、各大学を相互に訪問しながら継続的に会議を開催することで、大学間の緊密な連携体制を構築した。これにより、事業運営は円滑に推進され、5大学間で共通認識されてきた「教育の質の保証」、満足度の高い学生交流プログラムの構築、学生派遣・受入れに対する十分な環境整備などの取り組み効果が得られた。新型コロナウイルス感染症の影響を受けつつも、5年間で延べ264名の学生交流を実施したことは特筆すべき成果である。一方で、短期互換留学プログラムも含むDDプログラムによる留学生を26名輩出したものの、各大学における中長期留学の学生派遣数は減少傾向にあり、派遣先国の偏在も認められた。今後は、中長期留学の派遣促進に向けた支援体制の強化と、派遣先国の多様化を推進していく必要がある。

5年間の事業成果を踏まえ、5大学間においてインフラ人材育成の取組を今後も継続して実施することが既に合意されている。今後は、これまでに構築してきた大学間連携体制および教育の質保証の枠組みを基盤として、事業成果の定着と発展的展開を図る。特に、教育プログラムにおける学生交流および国際共同研究の継続的实施を通じて、教育・研究両面における実質的な連携の深化を推進する。

また、博士前期課程および博士後期課程において定着したDD制度に基づく長期留学プログラムを継続するとともに、日中韓による単位互換に基づいた短期留学プログラムの再活性化を図る。さらに、ASEAN 拡張型短期留学プログラムについては、ラオス国立大学との単位互換制度の構築を目指し、教育連携の地域的拡張を推進する予定である。加えて、教員間の研究連携を一層強化し、共同研究の創出と研究資源の共有を促進する。併せて、事業終了後を見据えた学内自走化体制の整備を段階的に進め、教育プログラムおよび国際連携活動を持続的に運営できる制度基盤の確立を図る。

特に、ダブル・ディグリー制度の活用や大学間協定(MOA)の締結を通じて国際連携の制度化が進展し、大学全体の留学生比率の上昇と国際化推進に大きく貢献したことは、本事業の顕著な成果であるとも言える。

カンボジアやラオス、ミャンマー、ベトナムなどを含むASEAN 諸国では、国家予算の制約、維持管理に関する知識や経験の不足、維持管理体制の不備などにより、既存のインフラを適切に維持管理できる人材が極めて不足しており、本事業に基づくインフラ人材育成プログラムのさらなる展開が大いに期待される。

付録 1 事業関係者リスト

日本・長崎大学 (Nagasaki University)

Nagasaki University	President	永安 武	Takesi NAGAYASU
Graduate School of Integrated Science and Technology	Dean	河本 和明	Kazuaki KAWAMOTO
Graduate School of Engineering	Dean	坂口 大作	Daisaku SAKAGUCHI
Graduate School of Integrated Science and Technology	Professor	蔣 宇静	Yujing JIANG
Graduate School of Integrated Science and Technology	Professor	松田 浩	Hiroshi MATSUDA
Graduate School of Integrated Science and Technology	Professor	大嶺 聖	Kiyoshi OMINE
Graduate School of Integrated Science and Technology	Professor	中村 聖三	Shozo NAKAMURA
Graduate School of Integrated Science and Technology	Professor	奥松 俊博	Toshihiro OKUMATSU
Graduate School of Integrated Science and Technology	Professor	冨田 彰秀	Akhide TADA
Graduate School of Integrated Science and Technology	Professor	板山 朋聡	Tomoaki ITAYAMA
Graduate School of Integrated Science and Technology	Professor	村上 裕人	Hiroto MURAKAMI
Graduate School of Integrated Science and Technology	Professor	藤岡 貴浩	Takahiro FUJIOKA
Graduate School of Integrated Science and Technology	Professor	田邊 秀二	Syuji TANABE
Graduate School of Integrated Science and Technology	Professor	瀬戸 心太	Shinta SETO
Graduate School of Integrated Science and Technology	Professor	石塚 洋一	Yoichi ISHIZUKA
Graduate School of Integrated Science and Technology	Professor	源城 かほり	Kahori GENJO
Graduate School of Integrated	Associate professor	鈴木 誠二	Seiji SUZUKI

Science and Technology			
Graduate School of Integrated Science and Technology	Associate professor	西川 貴文	Takafumi NISHIKAWA
Graduate School of Integrated Science and Technology	Associate professor	石橋 知也	Tomoya ISHIBASHI
Graduate School of Integrated Science and Technology	Associate professor	杉本 知史	Satoshi SUGIMOTO
Graduate School of Integrated Science and Technology	Associate professor	吉川 沙耶花	Sayaka YOSHIKAWA
Graduate School of Integrated Science and Technology	Assistant professor	田中 亘	Wataru TANAKA
Graduate School of Integrated Science and Technology	Associate professor	佐々木 謙二	Kenji SASAKI
Graduate School of Integrated Science and Technology	Associate Professor	山口 浩平	Kohei YAMAGUCHI
Graduate School of Integrated Science and Technology	Associate Professor	ダオ ティゴ ックアン	Thi Ngoc Anh DAO
Graduate School of Integrated Science and Technology	Technical Staff	樋口 由紀子	Yukiko HIGUCHI
Graduate School of Integrated Science and Technology	Technical Staff	森政 信吾	Shingo MORIMASA
Graduate School of Integrated Science and Technology	Technical Staff	神田 尚輝	Naoki KANDA
Graduate School of Integrated Science and Technology	Technical Staff	針本 皓平	Kohei HARIMOTO
Graduate School of Integrated Science and Technology	Administrative Staff	本松 大樹	Hiroki MOTOMATSU
Campus Asia Program	Coordinator	朱 凌雪	Lingxue ZHU
Campus Asia Program	Coordinator	木村 明子	Akiko KIMURA
Campus Asia Program	Coordinator	郭 美子	Mija KWAK
Internationalization Division	Plannig Director	橋口 文	Aya HASHIGUCHI
Internationalization Division	Plannig Administrative Staff	立川 真弓	Mayumi TACHIKAWA
Office for Global Relations	Assistant Professor	森保 妙子	Taeko MORIYASU
Office for Global Relations	Internationalization Officer	小柳 律子	Ritsuko KOYANAGI

Student Affairs Division for the Graduate School of Integrated Science and Technology	Assistant Manager	山下 さおり	Saori YAMASHITA
Student Affairs Division for the Graduate School of Integrated Science and Technology	Staff	酒田 実侑	Miyu SAKATA
Campus Asia Program	Coordinator	李 元淑	Wonsuk LEE

中国・山東大学 (Shandong University)

President	President	李 術才	Shucia LI
Vice President	Vice President	韓 聖浩	Shenghao HAN
Department of International Affairs	Director	孫 鳳収	Sun Fengshou
Department of Graduate	Deputy Director	張 恒旭	Zhang Hengxu
National Graduate School for Elite Engineers School of Civil Engineering	Deputy Dean	韓 勃	Bo HAN
School of Civil Engineering	Dean	張 慶松	Qingsong ZHANG
School of Civil Engineering	Deputy Dean	毛 德強	Mao Deqiang
School of Civil Engineering	Professor	王 冀鵬	Jipeng WANG
School of Civil Engineering	Professor	武 科	ke WU
School of Civil Engineering	Professor	張 炯	Jiong ZHANG
School of Civil Engineering	Professor	邱 道宏	Daohong QIU
School of Civil Engineering	Professor	郭 旭	Guo Xu
School of Civil Engineering	Coordinator	田 書瑤	Shuyao TIAN
School of Environmental Science and Engineering	Dean, Professor	杜 林	Lin DU
School of Environmental Science and Engineering	Deputy Dean, Professor	胡 振	Zhen HU
School of Environmental Science and Engineering	Associate Professor	曾 陽	Yang ZENG
School of Environmental Science and Engineering	Deputy Dean	王 志寧	Zhining WANG
School of Environmental Science and Engineering	Professor	許 春華	Chunhua XU

School of Environmental Science and Engineering	Associate Professor	牛 啓桂	Qigui NIU
School of Environmental Science and Engineering	Associate Professor	宋 岳	Yue SONG
School of Qilu Transportation	Professor	劉 健	Jian LIU
	Coordinator	程 夢榮	Mengying CHENG
School of Qilu Transportation	Deputy Dean	姚 凱	Kai YAO
School of Qilu Transportation	Professor	吳 建清	Jiangqing WU
School of Qilu Transportation	Associate Professor	徐 幫樹	Bangshu XU
School of Qilu Transportation	Deputy Dean	葛 智	Ge Zhi
Department of International Affairs	Deputy Director	張 佳琦	Jiaqi ZHANG
Department of International Affairs	Deputy Director	陳 凌	Ling CHEN
Department of International Affairs	Program Officer	王 岩	Yan WANG
Department of International Affairs	Coordinator	張 馨	Xin ZHANG
Department of International Affairs	Program Officer	劉 叢	Cong LIU
Institute of Eco-Environmental Forensics	Professor	段 海燕	Haiyan DUAN

韓国・成均館大学校 (Sungkyunkwan University)

Graduate School of Water Resources	Dean・Professor	전경수	KyungSoo JUN
Graduate School of Water Resources	Professor	김형수	Hyungsoo KIM
Graduate School of Water Resources	Professor	최민하	Minha CHOI
Graduate School of Water Resources	Professor	장암	Am JANG
Civil, Architectural and Environmental System Engineering	Professor	박승희	Seunghee PARK
Civil, Architectural and	Professor	권순욱	Soonwook KWON

Environmental System Engineering			
Civil, Architectural and Environmental System Engineering	Professor	심성한	Sung-Han SIM
Civil, Architectural Engineering and Landscape Architecture	Professor	김진구	Jinkoo KIM
Civil, Architectural Engineering and Landscape Architecture	Professor	진상윤	Sang Yoon CHIN
Civil, Architectural Engineering and Landscape Architecture	Professor	김문영	Moon-Young KIM
Civil, Architectural Engineering and Landscape Architecture	Associate professor	윤성민	Sungmin YOON
Civil, Architectural Engineering and Landscape Architecture	Associate professor	박솔피	Solmoi PARK
Graduate School of Water Resources	Coordinator	선우우연	Wooyeon SUNWOO
Campus Asia Program	Coordinator	이규민	Gyumin LEE

シンガポール・南洋理工大学 (Nanyang Technological University)

School of Civil and Environmental Engineering	Chair	Jian CHU
School of Civil and Environmental Engineering	Associate professor	Wei WU
Office of Global Education and Mobility	Deputy Director	Pauline Ho Yuen Chin
Office of Global Education and Mobility	Assistant Manager	Koh Sok Khing
School of Civil and Environmental Engineering	Chair	Chu Jian
School of Civil and Environmental Engineering	Associate Chair	Cao Bin
School of Civil and Environmental Engineering	School Manager	Linda Koh
Office of International Engagement	Assistant Director	Jeff Lau

ラオス国立大学 (National University of Laos)

Department of Civil Engineering	Vice Dean, Faculty of Engineering	Khampaseuth Thepvongsa
Department of Civil Engineering	Head, Dept. of Civil Engineering	Khamhou SAPHOUVONG
Department of Civil Engineering	Deputy Head	Douangmixay DOUNSUVANH
Department of Civil Engineering	Head of Survey and Highway Engineering Division	Keosombath SOURYADETH
Department of Civil Engineering	Lecturer	Phonepheth MOUNNARATH
Department of Civil Engineering	Lecturer	Singvixay SIMIXAY
Department of Civil Engineering	Lecturer	Bounthip CHANDENG
Department of Civil Engineering	Lecturer	Chayphet INTHABOUALY
Department of Civil Engineering	Asist-Lecturer	Vongsavanh SOUTHIVONG

付録2 学生の声 (参考例として、ここでは一部のみを掲載する)

【日中韓ダブル・ディグリープログラム】

李 嘉庚 (Li Jiageng)

所属：中国・山東大学齊魯交通学院博士前期課程

派遣先大学：日本・長崎大学

留学期間：2022/9/1～2023/8/31

Before studying abroad, I thought the world was so small that people in all countries were the same. Go to school, eat and work the same way, so that they all think the same way. But after studying abroad, I found that the world is actually very big.

"Reading thousands of books is not as good as traveling thousands of miles." How many worlds and people you have seen determines the size of your world. When I felt that I was under great pressure in scientific research and could not see the future, my Egyptian classmate Most said: "We will all have a good future after graduation." He is in his 30s and came out of a company to study for a Ph.D.

When I thought that foreigners would be unfriendly to me, but when I went through the enrollment procedures, it was raining heavily and took me to apply for one certificate after another.

As an international exchange student at Nagasaki University, I had the rare opportunity to immerse myself in Japan's rich cultural and academic environment for a year. This transformative experience had a profound impact on my life, broadened my horizons, and created treasured memories that will stay with me forever.



Living in Nagasaki is a fascinating experience. The city's peaceful beauty and friendly atmosphere make it feel like a second home. I quickly adapted to the Japanese way of life, from traditional customs to modern conveniences. The hospitality of the locals and the support of the university community made me feel welcome and embraced throughout my stay.

The academic journey at Nagasaki University has been both challenging and rewarding. Exposure to respected professors and talented peers from diverse backgrounds allowed me to exchange ideas, broaden my academic horizons, and foster intellectual growth. The emphasis on hands-on research and hands-on experience provided a holistic approach to learning that enhanced my critical thinking and problem-solving skills.

Here I would like to say that the students in Mr. Jiang's research group took good care of me, treated me like a younger brother, gave me some suggestions, and took me to experience Japanese life together. Here I would like to thank Professor Jiang, Teacher Zhu, Teacher Li, Zhang Qian and other teachers for teaching me many things in my future planning and life. Here, I would like to especially thank My professor Omine. Teacher Omine struggles in the front line of scientific research almost every day, and he can often be seen in the laboratory on weekends. It is such a conscientious teacher who loves scientific research so much and has invested a lot of experience in educating students. At present, my project is almost finished. Apart from reading the articles myself, professor Omine has helped me a lot. He has opened up my thinking and led me to explore and experiment together. I am very grateful here.



Interaction with fellow students was a highlight of my exchange experience. The friendships I have formed transcend national borders and language barriers. Collaborative projects and group discussions not only enriched my academic experience, but also taught me valuable lessons in teamwork and cross-cultural understanding.

Exploring Japan's rich history and natural beauty on weekends and holidays is a delightful adventure. Visiting historical landmarks such as Nagasaki Peace Park and Gunkanjima gave me a great insight into Japanese culture and heritage. Additionally, traveling with friends to bustling cities like Tokyo and Kyoto allowed me to witness firsthand the vibrant fusion of Japanese tradition and modernity.



The one-year exchange experience at Nagasaki University is a life-changing journey filled with personal growth, academic enrichment, and unforgettable memories. Nagasaki University's nurturing environment and supportive community have played a vital role in shaping my global outlook and inspiring me to become a lifelong learner. I am very grateful for this opportunity and look forward to using the valuable experience and insights gained here to shape my future career.

【単位互換に基づく短期留学プログラム】

津川翔 (TSUGAWA Sho)

所属： 日本・長崎大学工学研究科博士前期課程

派遣先大学：韓国・成均館大学校

留学期間：2024/9/1～2025/2/20

私が力を入れて取り組んだことの一つは、学業面での努力です。特に英語を用いて土木工学を学ぶという挑戦は、私にとって重要な経験となりました。英語で行われる講義の内容は高度で難易度が高く、初めは理解するのに苦労しました。しかし、予習と復習を徹底することで、徐々に内容を理解し、知識を深めることができました。

特に印象に残っているのは、グループプレゼンテーションの準備です。様々な国籍の友人たちとチームを組み、協力してプレゼンを作り上げました。このプロセスを通じて、異文化交流の難しさと楽しさを体感しながら、英語力を大きく向上させることができました。また、他者とのコミュニケーションを重ねることで、論理的な思考力やプレゼンテーションスキルも磨くことができました。

私が力を入れて取り組んだことのもう一つは、卓球を通じた挑戦と成長です。地元の卓球場に通い、そこでの練習を重ねる中で、韓国の元ジュニアナショナルチームの監督の指導を受ける機会を得ました。この経験は、私にとって技術面だけでなく精神面でも大きな挑戦となりました。監督の厳しくも的確な指導のもと、自分の弱点を克服するための方法を学ぶとともに、卓球への情熱をさらに深めることができました。

また、大学の部活動でも卓球に励み、多くの友人と切磋琢磨する日々を送りました。部活動を通じて築いた友情は、練習や試合の中だけでなく、日常生活にも大きな支えとなりました。さらに、卓球場で仲良くなった友人たちのおかげで韓国の文化にも触れることができました。特に、彼らの家で体験したチュソク（韓国のお盆）は、私にとって忘れられない思い出です。さらに、友人たちとともに様々な飲食店を訪れ、現地の多彩な料理を堪能することで、韓国の食文化の奥深さも実感しました。

これらの経験を通じて、スポーツを通じた国境を越えた交流の素晴らしさを学びました。卓球場での活動は、私の挑戦する心と協調性を育む大きな基盤となりました。

韓国での休日は、観光を通じて多くの新しい発見と経験に満ちたものとなりました。清溪川博物館では清溪川の歴史について学ぶ機会があり、都市計画や環境保全の重要性を改めて考えるきっかけとなりました。また、伝統建築を訪れることで、韓国の建築文化や歴史に触れ、その美しさに感銘を受けました。

さらに特別な経験の一つとして、卓球場で親しくなった友人のマネージャーから結婚式に招待され、韓国式の結婚式を体験することができました。華やかで温かな雰囲気の中で、韓国の文化や伝統を直に感じる事ができたことは、非常に貴重な思い出です。

また、偶然にも韓国に滞在中、ラグビー日本代表の友人が試合に出場しており、スタジアムで試合を観戦しました。国際舞台で活躍する友人を応援することができたのは、とても胸が熱くなる瞬間でした。スポーツを通じて国境を越えた交流を体感できたことも、大きな喜びとなりました。

これらの観光活動や特別な機会を通じて、韓国の多彩な文化や伝統、そして人々の温かさに触れることができました。充実した日々の中で、異文化への理解を深めるとともに、自分自身の視

野も広げることができました。

これらの経験を通じて、私は挑戦することの重要性を深く実感しました。卓球や学業を通じて得た知識や技術だけでなく、異文化交流や協力の大切さ、そして行動することがもたらす新たな可能性の価値を学びました。これらの経験は、私の未来の目標に向けた大きな糧となっています。

留学を通じて韓国の文化や生活習慣を深く理解することができました。卓球場での練習や友人の家でのチュソク体験、韓国の結婚式への参加など、異文化の中で実際に触れることで、単なる観光では得られないリアルな韓国文化を体験しました。また、現地の飲食店で多様な料理を楽しむ中で、食文化への理解も深まりました。これらの経験は、自分の文化的な視野を大いに広げてくれました。

卓球を通じて多くの友人を作ることができました。部活動や卓球場での交流を通じて、人と関わる楽しさや、異文化間での友情の大切さを学びました。また、ラグビー日本代表の友人の試合を観戦したことや、卓球場の仲間との日々の会話など、こうした人間関係が留学生生活を充実したものにしてくれました。

韓国の卓球場にアポなしで訪問し、元ジュニアナショナルチームの監督から指導を受けた経験は、挑戦することの重要性を教えてくださいました。初めての環境で失敗を恐れずに行動する中で、自分の限界を越える力を得ることができました。この経験は、自信を持って新たな挑戦に向き合う姿勢を養ってくれました。

英語で土木を学ぶという高いハードルに挑戦したことで、学ぶ力が大きく向上しました。特に講義の予習・復習を重ねる中で、自主的に学ぶ習慣が身につき、学問への理解を深めることができました。また、グループプレゼンで多国籍のチームと協力する中で、英語力やコミュニケーション能力の向上を実感しました。

清溪川博物館で学び、伝統建築を見て回るなど、休日も充実した時間を過ごしました。特に都市の歴史や文化を学ぶことは、自分の専門分野にもつながる興味深い体験でした。また、友人たちとの観光やイベント参加を通じて、韓国の美しい側面をたくさん発見できました。



陳 昱卉

(Chen Yuhui)

所属：中国・山東大学土建学院与水利学院博士前期課程

派遣先大学：日本・長崎大学

留学期間：2025/4/1～8/31

Thoughts on Studying Abroad at Nagasaki University

With the support of Shandong University and my supervisor, Professor Wang Jipeng, I had the privilege of participating in a six-month exchange program at Nagasaki University in Japan. This experience not only broadened my academic horizons but also allowed me to gain an in-depth understanding of Japan's educational philosophy, cultural atmosphere, and social environment, profoundly impacting my professional studies, research skills, and personal growth. Although half a year is short, the gains were substantial, providing valuable assets for my future development.

During my study, I took several elective courses related to my major. In Mr. Suzuki's class, he not only focused on delivering knowledge but also placed emphasis on cultivating students' critical thinking and independent learning abilities. Mr. Omine often encouraged students to ask questions and participate in group discussions, and this open classroom atmosphere allowed me to understand professional knowledge from different perspectives, enhancing my analytical and communication skills.

Besides academic gains, cross-cultural communication is also the part I value the most. During my half-year in Nagasaki, I made many good friends from different countries, who greatly helped me in both my life and studies. Through interacting with them, I not only learned some practical Japanese for daily life and improved my English communication skills, but also gradually learned to understand and respect differences in a cross-cultural environment.

Living in Nagasaki has given me the opportunity to experience Japanese social culture up close. Japanese society is orderly, public spaces are clean, and residents generally follow the rules. This 'civilization in the details' has left a strong impression on me. Public places such as buses, subways, and shopping malls reflect the Japanese people's respect for others' feelings, and this cultural atmosphere has subtly influenced my own behavior.

In terms of cultural experiences, I visited Nagasaki's Peace Park and the Atomic Bomb Museum. As one of the cities bombed during World War II, Nagasaki has a unique historical background. During the visit, I not only gained a more direct understanding of history but also deeply reflected on the meaning of war and peace.

The six-month exchange study experience has had a profound impact on my personal growth. First of all, I have learned to live independently and solve problems in an unfamiliar

environment. From initially facing language barriers and differences in living habits to gradually adapting and establishing my own rhythm of life, this process has not only improved my adaptability but also boosted my self-confidence.

Secondly, cross-cultural learning and communication have broadened my horizons. I have gradually realized that the development of the world is diverse, and different countries and regions have unique strengths and experiences. As a student, I need to approach understanding and learning with a more open mindset, rather than being confined to the education and research models of my own country.

Of course, I am also clearly aware of my own shortcomings. For example, in terms of research, my innovative thinking and independent research abilities still need further development; in terms of language, I need long-term effort to truly apply what I have learned. These shortcomings remind me that in the future, I need to focus more on practice and accumulation, striving to improve my overall competence.



Figure 1 Nagasaki night view



Figure 2 sakura in Nagasaki

【ハイブリット型短期留学プログラム】

PARK Junhyeon

所属：韓国・成均館大学校博士前期課程

派遣先大学：日本・長崎大学

留学期間：2025/7/12～8/26

Introduction

This summer, I had the opportunity to participate in the **2025 Hybrid Program**, which gathered around forty engineering students from Korea, China, and Japan. Over the course of three weeks, we traveled together across the three countries, attended lectures, engaged in group work, and experienced cultural activities. For me, this program was not only an academic journey but also a deeply personal one, offering friendships, insights, and inspiration for the future.

Insights from Lectures

Among the lectures, one topic left a particularly strong impression on me: the use of microorganisms to restore polluted seas. I was fascinated by how advanced engineering knowledge, when combined with community volunteers, could contribute to reviving marine ecosystems. This showed me that technology is not abstract knowledge but a real force that can directly improve the environment and people's lives.

As a student of landscape architecture in Korea, I was inspired to think about how my own discipline could also contribute to solving environmental challenges. While my focus has been on land and urban design, I realized that similar principles could be applied to ecological restoration in both terrestrial and aquatic systems. The lecture gave me a renewed sense of purpose: to use my skills in a way that benefits both people and nature.

Lessons from Group Work

Group work was another highlight of the program. During discussions and collaborative projects, I felt a great deal of kindness and support from my teammates and other participants. Their warmth left a strong impression on me, and it reminded me that in global contexts, kindness and openness are just as important as technical skills. I was grateful for their encouragement, and it motivated me to become a more considerate and supportive collaborator myself.

It was also interesting to notice cultural differences in working styles. Japanese students tended to take leadership calmly and produced outcomes that were clear and polished. Korean students, including myself, were often very diligent and hard-working, even if not always

leading the discussion. Chinese students, on the other hand, worked with a sense of ease and confidence that I admired. Despite these differences, what connected all of us was the use of English as our shared language. Through this, I was reminded once again of the importance of English—not only as an academic tool, but as a bridge for cultural understanding and cooperation.

Overseas Trip Experiences

The overseas trip portion was equally valuable. I was particularly intrigued by our visit to a dam construction site in Japan. During the field trip, I asked about the state of the construction and plant industries in Japan, and I learned that because of the frequent natural disasters in the country, the demand for construction remains consistently strong. In fact, I was told that it is common for families to rebuild houses after marriage or natural damage.

This insight made me reflect on my own career path. While I do not yet have direct experience in architecture in Korea, I realized that in Japan there could be many opportunities for engineers and designers like myself. I even found myself imagining a future where I could work or live there, confident that my skills would be useful.

Overall Reflections

Looking back, the greatest takeaway from this program was not only academic knowledge, but the friendships I formed. Spending three weeks together allowed us to go beyond formal exchanges and truly get to know each other's lives, personalities, and preferences. Some even started romantic relationships during the program, which shows how close we became. Personally, I had the chance to visit the home of a Japanese friend and the dormitory of a Chinese friend, which gave me an intimate look into their daily lives. These experiences were unforgettable, and even now, I find myself missing those moments.

The program also encouraged me to take further steps for the future. I plan to start my career after graduation, but later on, if I am fortunate enough to have financial stability, I would love to pursue graduate studies in Japan or China. My hope is not only to advance academically, but also to build a family in a multicultural environment where my children could naturally grow up exposed to multiple languages and perspectives. I believe such a life would be meaningful and exciting.

As for feedback, I honestly do not have strong criticisms. The program was well-organized and enriching overall, and I am sincerely thankful to the organizers for their effort in making it a memorable experience.

Conclusion

The Hybrid Program was more than just a course—it was a journey of growth, connection, and inspiration. I came away with new academic insights, a better understanding of cultural differences, and, most importantly, lifelong friendships. I am deeply grateful for this opportunity, and I will carry these experiences with me as I continue my studies and prepare for my professional career.



Zhang Dazheng

所属：中国・山東大学博士前期課程

派遣先大学：日本・長崎大学

留学期間：2025/7/12～8/26

1. Academic Insights and Key Takeaways

The 2025 Hybrid Short-Term Program was an exceptionally well-structured and enriching journey that masterfully blended online academic depth with in-person cultural immersion. The core curriculum, focused on infrastructure development, featured a series of insightful lectures from esteemed professors across partner universities.

During the online phase, the lectures systematically covered critical areas such as sustainable urban development, earthquake-resistant design, and water resource management. A key takeaway for me was how the professors, particularly those from Nagasaki University, emphasized not only the technical theories but also the paramount importance of **environmental adaptability, cultural sensitivity, and international collaboration** in engineering practices. This broadened my perspective beyond pure technicalities, highlighting the role of a global citizen-engineer.

The on-site study abroad in Nagasaki was the culmination of the learning process. Visiting advanced construction sites and historically significant infrastructure projects allowed me to see theoretical concepts materialize. This practical exposure provided a profound, three-dimensional understanding of our field, making it the definitive academic highlight of the program.

2. Feedback on Lectures and Group Work

The quality of the lectures was consistently high. The lecture that left the greatest impression on me was by **Professor Tanaka from Nagasaki University** on the topic of sustainable infrastructure. His presentation was not only rich in content but also delivered with remarkable clarity and passion, using compelling case studies to show how engineering

solutions can coexist in harmony with nature. It was truly inspiring. Furthermore, the language and cross-cultural history sessions were invaluable. They provided essential context, helping me understand the working and communication styles of my Japanese and Korean peers, which laid a strong foundation for our collaboration.

The group work segment was both challenging and rewarding. Our multinational team, comprising students from China, Japan, and Korea, was tasked with a collaborative case study on urban planning. We initially faced challenges in communication and integrating diverse perspectives. However, these very challenges became our greatest lesson. We learned to articulate ideas more clearly, practice active listening, and synthesize different viewpoints. Successfully delivering our group presentation was immensely satisfying and significantly boosted my cross-cultural communication, teamwork, and problem-solving skills.

3. Overseas Experience and Personal Growth

The actual travel to Nagasaki, Japan, was the most impactful part of the program. It was far more than an academic trip; it was a deep cultural immersion. Experiencing Japanese society firsthand—its customs, cuisine, and daily life—and building face-to-face friendships with students from different backgrounds provided an unparalleled learning experience that online interaction cannot replicate.

This experience fostered significant personal growth. I became more open-minded, confident, and independent. I learned to navigate a new environment, initiate conversations, and contribute effectively within a diverse team. The ability to adapt and thrive in a multicultural setting is, I believe, an invaluable asset that will greatly benefit my future career and personal development.

4. Overall Experience and Future Plans

Overall, my participation in the 2025 Hybrid Program at Nagasaki University was an unforgettable and immensely valuable chapter of my academic life. It successfully achieved its

goal of hybrid learning, combining "academics" with "culture" and "online" with "offline."

I am certain this experience will be a significant advantage in my future job hunting and career path. It demonstrates my capability to work and learn in an international environment and has given me the confidence to pursue opportunities in global engineering projects. I am very interested in future CAMPUS Asia exchange programs and intend to apply for the ****China-Japan-Korea Double Degree Program**** to continue my international education on a deeper level.

I extend my sincere gratitude to the organizers, professors, and volunteers at



Nagasaki University and all partner institutions for their dedication and hard work in creating this exceptional opportunity for us.

【ASEAN 拡張型短期留学プログラム】

Khamphoey KHANTHAJACK

所属：ラオス国立大学博士前期課程

派遣先大学：日本・長崎大学

留学期間：2025/8/21～9/20

Introduction

During my stay at Nagasaki University, I had the opportunity to participate in the Hybrid Program during the first week and then continue with laboratory-based research activities under the supervision of academic advisors: Associate Professor **Kenji SASAKI, Dr Eng.** This report reflects my overall takeaways, impressions, and feedback from lectures, research activities, and the ASEAN Program in general.

1. Hybrid Program (First Week)

The Hybrid Program was an excellent introduction to both academic and cultural experiences at Nagasaki University. The lectures provided a wide range of perspectives on infrastructure, sustainability, and global collaboration. I found the sessions on **Japanese infrastructure management, advanced concrete technology, and disaster resilience** particularly relevant to my academic background in civil engineering.

Equally important were the intercultural activities, including the campus tour and Nagasaki city exploration. These activities helped me build friendships with students from various ASEAN countries and Japan.

Key takeaways from lectures:

- Geo- Environmental Engineering and Biodiversity
- Introduction to Seismic Design of Bridge Structures

2. Laboratory Assignment and Research Activities

After the first week, I was assigned to a research laboratory, where I had the privilege of working closely with my academic advisor and lab members. My research activities focused on **concrete technology, specifically rapid-setting and early-strength materials for road applications**, which directly aligned with my master's thesis topic.

In the laboratory, I was able to:

- Learn Japanese experimental standards and techniques for preparing and testing concrete samples.
- Discuss technical details with researchers who provided valuable feedback on mix designs and early-strength performance.

This hands-on experience not only enhanced my technical knowledge but also strengthened my ability to conduct collaborative research in an international environment.

3. Overall Impressions of the ASEAN Program

The ASEAN Extended Exchange Program provided a holistic experience that combined academic learning, cultural exchange, and personal development.

Academic Impact:

- Exposure to diverse methodologies in infrastructure research.
- Better understanding of the challenges and innovations in Japan compared with Laos
- Inspiration to apply international knowledge to local contexts in Laos.

Cultural & Social Impact:

- Deepened appreciation of Japanese culture, traditions, and hospitality.
- Enhanced ability to communicate across cultures and work in international teams.
- Built strong friendships and professional connections that will last beyond the program.

Personal Growth:

- Improved confidence in presenting and discussing research in English.
- Broadened perspective on career possibilities in international research collaboration.
- Motivation to further pursue specialized studies and joint research between Laos and Japan.

4. Feedback and Suggestions

- The program was well-organized, with a good balance between academic and cultural activities.
- The laboratory assignment was highly beneficial; more structured guidance on research goals at the beginning would make it even more effective.

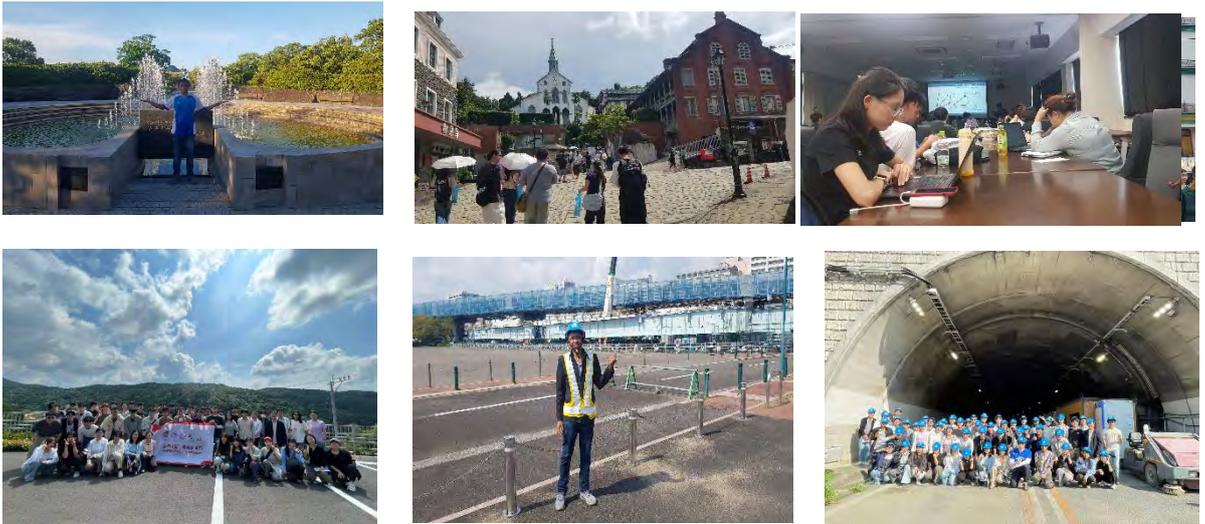
- I recommend continuing the hybrid model, as it allows wider participation, but maintaining strong in-person sessions for networking is essential.
- More opportunities for ASEAN and Japanese students to collaborate on group mini-projects would further enhance learning.

Conclusion

Overall, my participation in the ASEAN Hybrid Program and laboratory research activities at Nagasaki University has been an unforgettable and valuable experience. The knowledge, skills, and friendships I gained will not only support my academic journey but also contribute to my future career in infrastructure engineering. I sincerely thank Nagasaki University, my academic advisors, and the ASEAN program organizers for this meaningful opportunity.

📷 Photos

Group photo during Hybrid Program lectures.



Campus tour or city tour in Nagasaki and Site Visit

Laboratory research activity.



cultural exchange: Tea Ceremony Experience and Food



LIN QIWEI, ZHANG SUNHAO, ZHANG JINGE

所属：日本・長崎大学工学研究科博士後期課程

派遣先大学：シンガポール南洋理工大学

留学期間：2024/1/1～2025/3/31

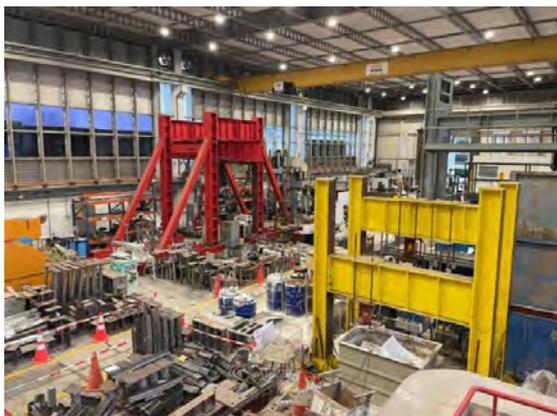
1. Introduction

As part of our overseas research study at Nanyang Technological University (NTU), we had the valuable opportunity to visit the Singapore MRT construction site managed by Taisei Corporation. This visit provided us with firsthand insights into the construction management process, safety measures, and project-specific challenges unique to Singapore's infrastructure development. Additionally, we conducted infrastructure inspections, laboratory visits, and research exchanges at NTU. This report summarizes our observations and learnings.

2. Research Exchange at NTU

We engaged in academic discussions and research exchanges with NTU professors and fellow researchers. Topics covered included: Geotechnical challenges in underground construction, Advanced tunneling technologies, Sustainable infrastructure solutions. These exchanges allowed us to compare methodologies and explore potential collaborations for future research projects.

Figure 1: Group photos of Research and Live at NTU



Apart from the construction site visit, we also had the opportunity to explore Singapore's infrastructure and visit NTU's geotechnical engineering laboratory.

2.1 Infrastructure Inspection and Laboratory Visit at NTU

Infrastructure Insights: We analyzed Singapore's urban infrastructure, focusing on transportation systems, drainage facilities, and sustainable development initiatives. Understanding how infrastructure is planned and managed in a tropical environment like Singapore has broadened our perspective on construction challenges and solutions.

NTU Laboratory Tour: We visited NTU's geotechnical lab, where we examined soil testing equipment, large-scale geotechnical experiments, and cutting-edge research projects related to underground construction. The visit allowed us to compare NTU's research facilities with those at Nagasaki University and explore potential collaboration opportunities. We engaged in academic discussions and research exchanges with NTU professors and fellow researchers. The exchange activities included:

① **Research Sharing with NTU Master's and PhD Students:** We had the chance to discuss our research topics with NTU students, exchanging ideas and insights related to geotechnical engineering and underground construction.

② **Discussions with Professor Wu Wei:** We consulted with Professor Wu Wei regarding our research directions, seeking professional advice on improving our study methodologies and technical approaches. His expertise provided us with valuable perspectives on refining our research focus. **Participation in Professor Zhu Hehua's Engineering Lecture:** During our stay at NTU, we had the opportunity to attend a special lecture by Professor Zhu Hehua from Tongji University. The lecture focused on the evolution of engineering intelligence and its application in infrastructure development, which was an insightful and inspiring experience.

③ **Exploring Laboratory Utilization and Collaborative Research:** We discussed the potential expansion of research collaboration between NTU and Nagasaki University, particularly in the use of laboratory equipment and experimental methodologies.

④ **Comparative Analysis of Construction Practices:** Our discussions also involved the differences in construction techniques and disaster prevention measures across various countries and regions. We explored how seasonal variations and geographical conditions impact infrastructure projects worldwide.

3. Site Visit to Taisei Corporation's Singapore MRT Project

3.1 Overview of the MRT Construction Project

The MRT project we visited is part of Singapore's Cross Island Line – Punggol Extension (P103 Worksite). The project includes the excavation, tunnel boring, and station construction necessary for the expansion of Singapore's rapid transit network.



Figure 2: Group photo at the construction site

3.2 Key Learnings from the Site Visit

During the visit, we gained significant insights into various aspects of the construction project:

- ① About construction management, we observed how site operations are systematically planned and executed, ensuring efficiency and adherence to safety protocols. And we gained a deeper understanding of the role of Tunnel Boring Machines (TBM) in excavation and tunnel construction. The site visit provided us with an opportunity to learn about the specific construction plan, project timeline, and equipment deployment for the tunneling process.
- ② Safety Measures: Taisei Corporation implements stringent risk assessment and mitigation strategies, especially in an urban environment like Singapore. The project involves advanced tunnel boring machine (TBM) operations, deep excavation methods, and soil stabilization techniques to cope with the city's geological conditions.
- ③ Multi-National Engineering Collaboration: A highlight of our visit was witnessing the preparations for shield tunneling, which is a critical phase before TBM operation begins. This project involves the cooperation of engineering firms from multiple countries, including

Japan, China, and Singapore. We learned about the collaborative aspects of international engineering projects and how different entities contribute to the success of large-scale infrastructure developments. We also observed how manpower and machinery are managed efficiently in tunnel construction. This includes the allocation of personnel, use of heavy machinery, and coordination among different engineering teams to ensure smooth project execution.

4. Conclusion

Our participation in this site visit, infrastructure inspection, and academic exchange provided us with invaluable knowledge and hands-on experience. We gained a deeper understanding of construction management, tunneling techniques, and research advancements in geotechnical engineering. The opportunity to witness real-world construction processes and engage in meaningful academic discussions has significantly enriched our overseas study experience.

We would like to express our sincere gratitude to Taisei Corporation for arranging the site visit and to our supervisors at NTU and Nagasaki University for facilitating this learning opportunity.

資料編リスト（別冊）

- ・事業交付申請書
- ・キャンパスアジアの学術交流協定書&学生交流に関する覚書
- ・日中韓ダブル・ディグリープログラム覚書及び実施要項
- ・南洋理工大学との学術交流協定書&学生交流に関する覚書
- ・ラオス大学との術交流協定書&学生交流に関する覚書
- ・国際コラボレーションラボ Agreement
- ・大学間における取組活動一覧
- ・5大学間の派遣数
- ・5大学間の派遣数（第2モードと比べ）
- ・インフラ共通科目講義一覧
- ・長崎大学ダブル・ディグリー派遣学生・受入学生募集案内
- ・長崎大学の派遣学生の TOEIC 点数
- ・長崎大学派遣・受入学生成績表
- ・学生アンケート結果まとめ
- ・事業取組に対する各大学のアンケート
- ・事業パンフレット
- ・事業取組概要（文科省提出）
- ・事業実績報告書（文科省提出）
- ・自己評価報告書
- ・第1回外部評価報告書
- ・中間評価調書及び評価結果
- ・第2回&3回シンポジウム冊子
- ・研究発表会冊子・事業交付申請書